

幼年期の終息を、「決定的な喪失」の訪れとして扱えた詩人があった。一体、何を喪失するのか判然としないままに、子どもは、その喪失を一種の寒さとして実感するという。

とすれば、幼児と呼ばれる幼い人たちを脅かす正体不明のあの不安、例えば、気がついてみたら親しい人々がみんないなくなつて、たった一人、見知らぬ世界に遺棄されているのではないかという、あの捨て子の不安や、いつもと同じ道を歩いているつもりが、いつかとてもなまい迷路に迷いこんでしまつて、どこまでいっても家に帰ら着けないのではという、ゆえもない迷い子への恐れなど、この訪れる喪失への予感とその先取りと置えるかも知れない。私どもにとつて、置き去りにされ、見捨てられることへの脅えは、懐しい悪夢とでも言うべき奇妙な想い出の一つであるように見える。

私どもは、誕生という形で始原的な分離を体験している。母胎内の至福の安息、フロイト流に言うならニルヴァナの状態からのこの分離は、私どもに、元型的な捨て子体験として刻印されるのではないか。そのゆえに、数多くの民族が、その始祖神話を一種の捨て子物語として語り始めるのかも知れない。偉大なる始祖の神は、しばしば、両親に遺棄され、あるいは両親を失なつた孤児として、この世に出現し、そのゆえの迫害の中で様々な奇蹟を発現して神性を顕現するのである。

人々は、みずからの始原的な捨て子体験を、神話という象徴言語で語り継ぎつつ、自身への慰めと励ましとしたのである。私どもは、「常に捨てられつつある」人間の、とりわけ幼い人たちの孤独に対して、鈍くあつてはならないだろ

(H)

幼児の教育 第八十二巻 第七号

七月号 ㊦

定価三〇〇円

昭和五十八年 六月二十五日 印刷

昭和五十八年 七月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一―一九六四〇番

●本紙御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします